昭和完譯

# 源氏物語小序 二

五十嵐力自筆稿本

特別
へ12
4875
2

特
へ12
4875
2

# 榊

小川如光指定の題は残暑の事

和妹子がじゃが馬鈴薯の乃奈子の稿本に

まするひとちて俳句の季語る。

明治二十年八月五日（一の週）の午後、「茶」を講じる。それ例繰して茶の間に案へ行き、好なる人に示して、飲むを共すつしその最近にて、な心気ある、じゃが藷の茶子を講じて、抹茶に服を持ちまして煎餅を行じて榊の葉の緑葉を絞りなじむ。此の日暑さ厳しく、日は

たゞき、菊の四季との時まさに、国新すゞしくて相に向ふ。諸に今夜体験に大宮殿と積雑みくしと幸横のりふがる宝情ありて、その麻本の山村にても其の各園的枝の尊きによりて園芸と詩みさりとて大切なる名々と為掛へ、或は各秋之と畑中の安全なる積すなど、多分なるす起きて、整陶しき心得しこれど、和せは伴すれて行きつゞきち興の新世界を造べり。

ちあて保兵物価を猶り候手しなる所にゝさゝか氣づき、すもはるに打ちうて全議を読く

10/20 南書総資會原稿用紙

る解釈は、やゝ深く意が含まれることとなるが、今
更いよく気が一定義後の事実として、先づ現代
俳諧の事を論ずるに当つて、特に深く関する
事は、今迄の俳諧研究が、講釈、俳諧系統、
俳論の各部面にわたつて、第一には、論議、注釈、作
品の味を解せむることとなる。第二には、創作的
味を始めとして作品の味を解することの出来
ることとなる。此の二つは、正しく俳人の略述
作品の態度を尊重して、作品と言葉本位、に解
釈せんとする風気の興隆をなすなり。

吾等は常に水戸の大日本史を翻読する時、此の筆を見るにつけて感嘆することがあった。大日本史は当時の選ばれたる碩学を集めた。彼等が其国体の見識、高く、深く、精しく淳粋を要め、儒学に寄し、修辞し、洗練せんとしたる熱心、字句文字の表現に対する苦心等には、感心拝せざるを得ず、苦心を感じた。然れども彼等が消費した精力の一面には気の毒な所が少なくなかった。彼等は常に、尊厳、如何にも、峻厳を求めさるを得ずして、正確に結構したるのみならず

ず、安住し、ミンペーし、磔とぬざれてゐる。或は純
係の眼より、或は理論家の眼より、真面目
に翻訳し批評するのみならず、狂言師、道化役
者等がかざらする言葉や作品をも、正面より真
面目に翻訳批評をなしたる。
此の傾向は我が近代文学中、最も[illegible]して見ゆる
る、而して詩論、評論を以て文学の無味の一つと
する傾向物語の注釈者、考証家、のみならず批評
にも看過すべき。[illegible]は[illegible]する[illegible]
の要素[illegible]、[illegible]の一節

と語りて、一言を述べんとす。事は学長が十四
年の昔の上を引抜せる條にて、その絶妙に三
日の行の條の明道を論じたる一節なり。大部
断片なる片々の事象を、拾めて淡く、微妙に、上品
に、如何に新鮮的に言ひ表はし、付け方へ、しめたる
筋が僅にて、正しく作者たる作者の面目たる筆
跡なる事と思はるるが、あるは少なくあらめし。
惟之を要して、この條、かう熱心に筋狭

二十三

ききすれにはあらで、成日の筆に寄らせよ。
それは忘れてきはすれ」と打ち据ゑ

みてのたまふ気色と、心ときめきにて、ふ
と思ひよりぬ。惟光しかるもあらで、げ
に素朝のすゞめは、日擇して聞ゆべき
ことにこそ。さても子のこはいくつか仕
奉らまほしう侍らむ」と、まめだちて申せば、
「三つが一つにてもあらむかし」とのたまふ
に、心得はてゝえちぬ。物馴れのさまやと
おぼえ侍り。……
のたまひし條、思ひていたう苦しかりてねも
て見ずかり。みの言はかとなくて、私かし

77

うや思さもく、思ひやり深く心しらひて女

の詞を子を呼び出でて、「られ思びてま

おうも侍らむとて、香壺の箱を一つさし入

れたり。「ただしかたの枕上にそらすべき、衣

の物に囲侍る。あなかしこ。あだにす」と

いへば、あやしと思へど、「あだなる事は

またならぬめりと」とて取れば、「まことと

に。かはさる文字思ひ給へ。よも文

侍らじ」とて。若き人にて、気色も文深

く思ひよらねば、もて来りて、御枕上の几

灯ようさしくれたらと思ふ何の用にさへ
一うせ治るうものし。（蔦の屋）
うつと労働選十日以の詳には、たすめく書いて
ある。

憶兒とか呼び寄せなすれて、「此の餅とか
うらぶ風に話題も大概ぶしないで、一
色にして、明日の日の暮に持つて参れ。
日曜は縁起のわるい日だから」とにこやかに
信女にすうなが、寒しのよい男であるから、
そのか説つまで、さつてはと心付いた。
そうし

て済までおらず、「ありまほど掌紅姫のお
説は、月並りを超越した方が宜しうござい
ます。　ではこの子の係は数つお授へ申し
まあ、と、其の日本語として尋ね申し
上げるので、「此の三つが一つでよいで
あらうと係りになると、もつあり居みせん
てこつて続くのを、触れたもの、よと感心し
呟すのであつた。……
かねて御もつけになつた様は、たいそう配
か変はれ旅先に、こつそり惟達が出来る



10/20 南書堂製原稿用紙

のであつたが、世間のやうな年頃に転ん

だのだ。師つて恥かしう御座なるで

あらうと、いとしくもお客車に入れて、その

娘の姉とその者を呼んで、「それはたしか

に父親が家へお袋に日見らせる為お話の品です。あた

に思つてはなりませんよ。あなたがしたこと

云ふのを、ゆなにとやうなことを思はれながら、「あ

だな事なんはまだ一向に存じませぬのに」

と、さう云つて、家は出るので、「本日は先

ぞその言葉と忍んで下さい。」よもやお前

「でお使ひになりはしませんか」と云ふ。
若い娘は何の気にとやる様子が分らないな
がら、その手をそれと掴つて来て、かん袂を
よの広い袖からさし入れたので、手らは袂
から、例の巧い工合に訪れてなつたである
子。
宮田全總氏の譯ではかうある。
君は…蝶と云はれて、「あの顔と、あゝ色
心に澤山にではなくて、明日の事に萎んだ
よ。今日は縁起の悪い日なのだ」と、微笑ん

て仰ゆたる古株を見て、惟光は先の紀いた
者なので、その譯をふっと心附いた。惟光
は嗜ずてをあらすれ、「ほん」に尊敬の始め
には、目と擇んで見上がるべきで御ざいます
す。それはさうと、その子の子の係は、勤つ
まうならば寡いものでございますまう」
と甚綴になつて申すので、君は三つが一つ
かでよいであらう」と仰せたること、惟光は
すつかり心得て総つた。釣鉤れた株みで
あつ、ずつと君は思ひにふる。……

仰せになつた様は、悪人で、ひどく北と東か
ら持つて来つた。此納言は華麗の人な
ので、姫君が恥かしくお思ひになろうかと、
唯其は思ひやり深く心遣ひをして、その
娘の許と子を呼ひ出して、「これをそつ
と姫君に差上げて下さい」と云つて、香を
の運と一つ差出れた。「なにかにか枕元に
差上げるべき晩ひの物です。気と取りて、
あだにはならないやうに」と子々と、詩は不思議
あだとは思ふのか、「あだ事で」すなはした

筆がありませんもの」と云つて尋ねると雄
先は、「今く夜は、さうした言葉は言思ひし
て下さい。よもやさうした筆は口にはし
ますまいね」と言よ。辯は筆としない者
で、筆の材も深くは思ひ寄れないので、私
つて来て、お枕元の小几帳から筆を取れたの
を、君が例のやうにお書くなさることであ
らう。
その後與謝野晶子さんの譯、京都の五新文學叢
書の譯まで、古典からりの調子のものであるが、紛

はどうも序文の持つ諧謔の味が現はれてゐるやうに思はれてならない。長編物語で、新撰の事を書いたもの、三箇日の読初めの様のことを書いたのであつたら、いづれも多少はその作為を現はしてゐるには相違ないけれども、序文の持つ、庸凡らしい中に清楚と含蓄さや、一点にすましてゐるから読者やおかると得ないやうな、二十二年の業余旅行の男子が、十日余の利養編纂で眺めるのすがたとまだ根本もやめ千年に、体現をも、風流として、新生新風としてのべき研究周囲の

所作を施した此の贅沢品の儀式の鏡まで、思よく理解し得るやうに考へられぬが、併し結局で、同時にそれは漢者、詩綺者、洋者、批評家が作者の心理、筆致、新緒と美術味覚や所から来たのではないかと読まれるのは甚だ遺憾なことである。

　それ等を書いて歌らしいうたなるを言つた後に、自分の浅識を出すのも恐縮がましく少弟子のやうであるが、試みに前帖に試みたその部分を挙げて見ると、その通りである。

是は継述を乞された。

その様を、かわいらしく北山にぴったりと
ではなく、唯だ白の一様だけ、明日の暮れに
持って出て。今日はひどい雨に逢はさ
れた。恐ろしい日であったからな。
と、意味ありげに、にこにこして仰しやるは
様子を見て、それ者の性悪、すぐにははあと
思ひついた。言ふ事ならば言はずではゐら
ず、まさに聞きただしもせず。
此経の意趣報時のの内容は今日を選んで聞
会すべきではないのですね。今日は文の子

ですから、明日は子の子の話は、さて其の子ね
のおのお収録は、いよいよ滑進すべきでござ
いませんか。
と真面目くさって言うこと、
三つが一つ、まあ三分の一でよかろうよ。
と仰しやるので、真面心得て立ち上った。というい
好しく、さすがん馴れたものだと、思は思し
て入らっしやる。……
余せられた様は、罐蒸が大分花と変わって、
さつそうとお座りした。その御言に有法が



10×20 東書原稿用紙

「それは、大人の手前玉が揃わるても宜さ
うなと、気を和めて、サ田言の始の辞とい
ふのを呼び出して、
「それをこつそりと下げて下さい。」
と言つて、香盒の箱を一つ差出された。
「これは間違ひなくお披露に差出さねばなら
ぬ、大そうな殿様の品ですからね。あら
粗末にやらないで。それだから大事になさすつ
てはいけませんよ。」
と言つて、夫婦事をいつもは思つてないが、許を

のさるも

わの

みだらな事など、おだしした事がありません

ようなので

その通り、その通り。古道人様の御婚の

指だ、それにあなたは乙女のあなただ。古事

そんな詞は御ゆみにならなくってちゃいけ

ません。あなたは古道人様の前で、そんな

詞を使ひ交さなさる筈がない、またあなた

はそんな行儀などのある筈もありま



10 20 南喜堂賞會原稿用紙

すまいか知ら。一般の愛俳者の一筆双叙
のしやれた俳諧の味である
と、まづこれを例として譯して見た。譯しあれ
ば陰象的の翻譯と行かうなる見方の味で、先
人達の違つた見方、或は方譯し方をした個所
について精細な詳解をし、中間さまざまの著者等を
も試みたいと思つてゐる。俳諧の味について
は、又どの時代の翻譯の部で一言したいと思
つてゐる。この序引は論文の曲目を行すべ
きものではないが、ちと横道過ぎたらしい。

なか〳〵、空寂。

徳利に、せめての日、安善行さの南無に浮べる二三

点をかゝげて自ら慰めることにする。

蟋蟀雨あびつゝ庵を戴ひと

しばし忘れて文学の眼をひらく

植ゑられて他力にゐてる早稲らが

自力にゐつとゐるがすがしさ

古径新径を踏みあるきて

思惟するゝ夏の山ん

さうしてゆくつまずいついつか屈みつゝ

背のまるくなる老のかなしさ

青く黒くなりつゝ、増産に
いそしむ土もせずしからうむ

鉄にあくれ肥によごれてあれするに
物うむ土のけなげなるかな

何ざえくは壁画なる先師の事業、日本の
天神地祇、ちちか蔵を築き住みて、われらの身を
暖かならしめ、我が業を尊き物語かな。

昭和二十七年八月

掲出の挿入

此の（五十才と五十一才との）間に、私は人知れぬ驚き、悲しみ、悦び、経験を
び感謝の思ひ出す。私は彼の方に臨終に
伯れ半身不随、言語障害、意識朦朧の生ける屍
とまで云ふか、半ばにして意識をも、言語を
も、半身の不随をも忍びて、二十二日目の
九月十一日には其の人の命は絶えて入滅と
許され、まさに十三日目の九月二十二日には、
「まあ、善哉は三四十分経過して、微笑みし

10/20 内閣印刷局用紙
12.3―10000

150の追加 挿入①

20.8.5

べ、延長さい」とりよ、七十三歳の土佐の者
為政者の許可を得、あの勧めによつて、南の絵
例に根と持ち出し、数文緯の常備書用の文房具
など取り揃べて、五六年位の二郎れをする、此
を一條右と二三十分ぐらい、萬序字を書唄に
押さてつゝ、ちゃの文学学部と文句上の
無謀対決、乃ち殊勲術家の名蹟を試みるか。
幸うて、それでの鏡塊とて、回数何と書き
つづくることを清ある。せめてなん一枚にて、
以下散るても、とくつゝ、筆を離すが、差紛ん

も回ねを紀えつつに礼拝して、天に神し、地に
雄大なる造化の尊霊に額づきつつ
峯をおさめつ。此の夕には我が筆の上の母
をもどろかちえさみありけるか。ゆあや、か
きじけるや、日没ちず遠る旬夕の神々並
ては茎ぬの苦をわれを悩みて、思ふままにけ
と語らひゆかん。
此の窓外の林の景節は次第のめくろさ
八月二十一日の夕方、われは夕陽を浴びつ、
乗蒸利紀史風土の意のあまりと描きし、御の

以下二

二科の巨木古[illegible]と大[illegible]を仰ぎつゝ、やがて
て帰らく家ねずく、夕闇の窓に[illegible]るが、何
の[illegible]の晴きと、偽りに蛙の多きとん[illegible]し、
未だ花はなく夜ねんとて、下[illegible]初夜の八時
ふに[illegible]のかんと[illegible]。[illegible]をえちまづ
る[illegible]好き[illegible]あやして[illegible]と八[illegible]
のよろと[illegible]、三[illegible]ずかりと[illegible]過ぎて、言[illegible]の
[illegible]ろに入り[illegible]の[illegible]と[illegible]りんとし、ひろみ、も
う手が[illegible]めん、[illegible]が[illegible]をうく[illegible]れず、[illegible]ちバ
文りと[illegible]れて、何[illegible]、右の手がだらりとたり

南畫院賞會原稿用紙
12.3—10000

て感覚を失ひ、言語は殆んど利かずなつて、私
ぬるからあれよ／＼と驚くのみ。妻と[illegible]
きて、伊藤氏の家人を呼ぶ。やがてはあわて
打ち合せ[illegible]、夫人、[illegible]君、
十二年の[illegible]及び[illegible]の[illegible]素子夫人の
四人揃ひくあつまつて、介抱しつつ、医者を
迎へられる。軽症なれど脳溢血なり
と。上京に先立ち、我には[illegible]して[illegible]を知
ぬかりなかりしが、あれは[illegible]の第一人者なる
稲田[illegible]氏[illegible]の[illegible]治療を受

はせおう人の良き注意によりて卒中なるべき

る場合、脳充血がまず脳溢血になるべき中に、

病魔の手当を御ゆい、大抵は大方未発に防ぎ得べ

し。それには如何にして強を防ぐべきかを研究

すべし、即ち脳出血を避けずに脳に溢れ漏れる血

液を後に圧してかず脳を暖くにすれば、

大抵は善良の健康を得るか、而かも多くは

病源の治療を行う事と為すべし。事

は医の忠言に従いて一方法と取ること

劃りつつ、謹言して病魔を防ぎたり。



南雲堂賀會原稿用紙

12.3—10000

追
(6)

れは半ば睡れる意識の中に此の訳切なる
余裕と勝人の惰存と悦びて、思ひ出なく
にて鬩がれなかう絶間なく、お前は寂人でみ
ぬくれと成と溢れし居たりしが、その中に望
訓を遁れて園時に、友の手のやうやく利き
来り、言語感覚も大分快復し来たれりと感
じ、もはやしもし妻のお話すると信
じつつ、不來るを来たて、探ゐの日曜続けしたる
手を振りながら、感謝を述べつつしが、翌二
廿三日（雪）に至りては、友の手は麻痺悉く江為



12.3—10000

の状態に陥し、言語感覚まさに停ぎ平常に近く
一つ（それらを見出させ）状う　名が習慣われるが言語とも感じ
なる時の不思議の流れる何として言ふ表
はずだ。　その後言語感覚はいずれか逆転し
それり感覚されども手足のしびれ等われるの
感じ、非常の働きは意で様子に近き、まさに
自ままよう長く続きおそらく回路線に半身の
くみの全く、その意味でも乙ともまさに消失
させ、それは何処か天地細胞の際でも、その性
はそれ何とも言ひ表はし難き継続なる状の感



南雲堂書店原稿用紙

12.3—10000

送り
8

湖に包まれつゝ、行方に迷ひぬ。

其の恩なからう 接するも恵なからう、

神恩、御恩及び師恩[友恩]によりて、文章の筆にまさ

るべきは謝するなく、るるはせる。[illegible]

深大なる恩恵を空しくせざらんことを。

（[illegible]稿の内[illegible]）

昭和二十年九月二十三日より十二月に至る

三月ばかりかゝりて書畢し

[illegible]

[illegible]（署名）

花散星

序に代へて　断腸の腸打を

２８二

草に花木の紅葉ちらずして
花散星のあはれを書きつぐ

まさかこんな事を考へることにならうとは思はなかつたが、去る八月二十一日に突然襲はれた脳溢血は、我れをして寸善尺魔の感を深うせしめ、ますます人生無常のため息をしみじ



20.9.15

感ぜしめると同時に、更に深く天助人恩の限りなき難有さを感ぜしめた。しかして其の報恩のためには、病体の弱身に鞭うつて、昔日の孫子と奉仕の天分に恥ぢざるらしめと考へるやうになつた。

その（著の）訪れた稿を起こすにあたつて、その直接に浮かんだ数者を記して感謝とする。

一行アケ

たゞ二

あらき寝せかうしなはおなけじ、この自身、臆物に（はめとの）さけるめくして、使用されるだけ使用


10/20 南書體賞會原稿用紙

れるだけ健ならむ、生ける日の限り、奉仕らむ
（砧詞、雑吉）

わが病そぞろふしぎに似たりけり
あなた任せにそぞろ癒ゆがに．

わがやまひ余生さかりにあらなくに
人のなさけと推りて積もらむ

竹のやぶに雀囀る竹林も
つれづれなるらし雀と遊ぶは

久にして（生きてあへる日）良寛の大御歌に学ぶとらはせ
良寛の大御歌の前に立てわれは

2字 二

田の古跡はただの小路　穂浪うすく
秋の意的に譯身わたる

一行アキ

昭和二十年十一月三日

菊葉子新婚の前祝に其の成終を記して
友鶴子新居の竣工を
帰還難民の心迎へつつ

譯者　謹識

10/20
南書館賞會原稿用紙
12.3—10000



24.11.3.

新教室

代序（新緑の推移）

幸に本家のものまで数多く挙げて

せめて筆の流れを書きゆかん

まさか新しい事を考へる事にならうとは思は

なかつたが、去る八月二十一日に突然先生から

臨済宗は、始めとして日本人の心を深うせし

め、又人生意義のためなるをしみじみ感じ

しめると同時に、実に深く先人恩の偉大さを







20.11.3

感ぜしめ、その熱思のうちには秘緒の弱点に難
つかって、日毎日の結年を奉仕の大事に献げ捧
るものと考へるやうになろう。
それについて思ひつくまま作は、紅葉か
ら雅趣と親縁の推移の関係である。私が若
縁あって その文学の出来た理間 中の作
（昭和二十五年）の三月の二十七日で、まさ書い脱
につめたく、ぶつくつ冬した略とホーバーに駐留の
様巻として居た頃であった。従って本々の本
の学は書の支系に張り切った情緒ぶりを見せ

ならなければならぬ、それは外的の膨張を見せぬ程度の内的潜在の準備的充実だけに止まる底のものであった。私はかういふ一歩までかういふ心持ちを持つて新陳代謝の植物群に迎へられて成木の落葉し盡して直裏の家の農家の南庭に佇んでゐると、全く農村の作家となるつけたのである。

而も木は昇進のあちこちに採めて構わけ水田とみるものだけで、おもなる農産物は麦と馬鈴薯と甘藷とである。此の里に要まするとよる勝の

地を埋めた虎尾の古い昆虫学の名刹があって、
私は曾てその寺の手術日側記をめでて、
うつくしき愛生園生の壇々の
よにやすらけくあまたたつ
と詠んだことがある
生円寺るのであるか、私の磁園寺後は、下交替経
の畑と思に近い湿緑の高飾畑と鎚壇の
やうたわ交互に見やて、その上に、
花柄に落ちみた二棟の大伽藍の抵えた
持であった。私は此の磁園地に来て始めて変

畑の実を知ったが、その頃の麦畑は、荒蕪の麦稲作業に固められつつ、辛うじて、古来の畑を保存した原始の絵を維持してゐたのであった。吹き荒む風にも吹き荒らされず、深い窪地にも地崩れせずして、やうやく灰燼の中より跡絶の地面の方々に存在を保ってゐるのであった。縦ってする時の麦畑は断続する、淋しい、荒ぶるかぎりかの峡谷の点である。その淋しい点が中央で探索中には大きな谷々、その先端に持っているない草や藪が密生し、其の中に方向を迷わせるも

い青い線を画き、本来は青い線と線とが接近して、多くは線ともいふべき一條の紋を成し、境する線と線と離れた花さなって変生り一往の花瓣を成さうやる段落で、それから外套の如き斑と、併せる変形の系統に見せる。それが三月より四五月に至る期間に於て素人写真の目に映じた変の単生であるか……

無責任の素人写真家あさんは、つい単一の変海淡に遊年を嗜っているものが、変異の目的は言はぬ

変異いちおちを取り囲んだ

東京近郊の新緑の移り変りにある。　三月下
旬の頃には、まづ山にも里にも新緑と云ふもの
が無い。もしからし
りものがありとすれば、山には魅芽早春の
芽を見せる梅や辛夷の花の類があるばかり、畑には
旧冬以来細々として麻痺と見せてゐる蔬菜
の類があるばかりである。此の野菜畑地の淋し
い早春の景色に呼応して四方の山々が遠目に
眺めまして（見せ）てくれる草葉は山の要地なれとた
めた真黒な木盤を中心として、其の間々を一

縦の山岳の気息呼吸ともいふべき、ぼうつとした雰囲気で繋ぐことである。高い峯や、尾根や、谷間や、山の樹木の茂れる国、茂れる国ともいふべき地帯を、山々を背後とする藩侯でも有るかの如く、作か
けし一年の風雨霜雪に堪へ、晩節を完うしてまつ忠義の将卒でもあるかの如く、要害を堅め、隘路を守り、山霊に奉仕しつつ、今や春を迎へて進軍の旗幟を建て直さうとする蒼髯男振の常
緑樹、杉、檜、樺等、細かに見れば笹も、枝振も様々であるが、とにかく晩節を守つて山の森

紗を圍んでゐる蒼翠の峰を中心として、大地を這つて纏るやうな一線の山氣を浮ばすことである。春の陽氣に誘はれて、見えては隠れつゝぽかぽかと地面から燃え立ちが絲遊、陽炎のやうな陽氣を捌けかすことである。或は山一帯に白い、青い、紫の、蒼色の、とにかく蒼色の、見えるやうな見えないやうな、佛毛のやうなものが地面を蔽つてゐるかのやうに見えることである。紗の目々濃縮したところに煙が、その山の靄圍氣として、山氣の浮ひとして、陽炎として、佛毛として浮

かね氣氛の山嵐が凡そ半月前後も立ち續きえ
えつゞくであらう。その中に山のぼうつと
した空氣のゆらぎそのものが、いつしか色彩をおびて
来る。そして其の色が僅かに濃くそして僅かに
物色をおびて来る。或る物は白く、そして或る物
は緑に、そして或る物は紫に、そして或る物は黄色に
なり、或る物は黄色に、そして其の白、紫、紅
黄、褐の色が目まぐるしく其の移ろひを降え
びさせて、他の物とまじり合ひ乍ら色々に變つて來る。
これが雰囲気が雰囲気としてあたかも其の目に映る

第一要で、それがいよいよ其の特色を発揮して
ますます、近代的紅葉以上の美しさを見せ、僧侶
ゆる「緑の錦」の派手な大観を現するやうになる
るの也であるが、
此の雰囲気、陽炎偶光が徐々に推移し、秀麗
し、意依し、陽華へ緑の錦となるまでの移り変
りの律に目撃される節季と呼んで、新年
し、登場する調子が、何ともいはれぬ興味で、殊
に今まで比較して長時期の味はひがあるやう
に思はれるのである。


10 20
南畫鑑賞會原稿用紙

学ぶ心なし。俳事の範囲茶事に必ずしも人同じ心がある。われらはあるまいが、その心であれば、俳事もわれ／＼の心境て働いて居るのやうに思はれるところがあい。思ふに茶事の内に心の足る如めは、此の無機的の気流とも山系とも絶えともいふべきものでそれが一種の色を持つて、谷折れした枝物の格実々々に見え出しな行における俳事の理想は、山の如き姿から本に偏えたる俳丈夫のやうな常磐木であるやうに思はれる。

絵筆は思ふであらう、否それは裸身の、躰をこけた、
足音らしいものである。美しい眺めはなし、一
山の壁めとあるやうな芸術を見せられる風景はな
く、仲間同志語り合ひ励まし合って大衆の好観
と感動させ乃るとは一寸縁がありさうではない。
丈の高い声をたてるの連り、咲くや嬉ぶのでびた
譜ま也学に近いものがなくなつてる、
とある、絵筆が奮闘努力する為錦の座とるるば
かりである。其くがどのあるかなきかの地位
を脱して、世間から存在價値を認められるやうに



10×20
南書堂賣會原稿用紙

にするのは、むしろ、あの作家である専門家に参ばならぬ。それは先づ第一に、禅身に[illegible]勝を選ぶやうにし、それ自体は[illegible]格の[illegible]の[illegible]格の[illegible]身を殺すと触れさせる針気山あらしの中の杖[illegible]の[illegible]身まなざしもつかぬほども、武は棒格のやう事に[illegible]風気は学じ得ぬにしても、とにかくそれの性分に適合した勝敗をつけて、禅身に先新と信へ、多く世その伝統をまとめることにしようではないか。従事はこんする

とらへつゝ、あん椿の花の咲くを渡したであらう。

らして香り咲ひ細めは葉先にちらくする

絵巻の桜の[illegible]いものであるが、殆ど

めて侮れぬ。其の真心は容易に拭いられ

て来た。見よ、桜等が葉先のわき眼差は、やがて

夢となった。やがて夢林の美しい形となる能

は天狗の顔面のやうな大きい桶の形ちもの

となった。芥子菜本の小さい芽から、衣紋、直線い

わくな夢の汲みわる泡は、ちとつは手品師か

ぴつくり鞠から花粉の飛沫を散らすやう



10×20 南書館賞會原稿用紙

なものである。正月の飾りには常に縁起物として珍重されて[illegible]冬の緑の[illegible]と読んであるが、葉の長いものになると、ほんとに言葉通り、刀の身と鞘の柄を除いたやうなものになる。形もさうだが、色は若葉から成熟しきつた葉の現はす色彩は、[illegible]く日光の葉も避ける色彩みであらう。地味なものとしては常盤木の落葉の深緑紺青の黒ずんだものから、[illegible]の白つぽいもの、藤、葡萄、山毛欅、白樺、いちゐ、楓など、桜

蔓、かづら類の葉も近いもの、これから紅葉、辛夷(こぶし)
などの緑ある緑を豊富にして、落ちと新鮮の緑を
相を含んでゐる。極致の雑木には手入の樹口のぬき
にまつはれ、花よりも紅葉よりも形姿の個に甚しい
ほすすの美しさを見せてゐる。裸身の見すぼ
らしい雑木林縁が常緑樹を背景として、目の前を
しのいで努力した結果は、世間を驚かし、常実（功夫を凝らしつつ）
木を業とするもの、行者目からも信じられないの絢
爛たる紅葉と暮れなずむがし、すがすがしい緑の花
と嘆いとする得意の言語心と足ることを知ら

ない。仰ぐ心とは、崇高絶美にして、常[illegible]本を[illegible]仰
讃嘆する心[illegible]を捨てしめ、或は[illegible]の空
に沖る蒼穹の深刻は龍の蟠居するかの如き物[illegible]
或は飛翔[illegible]つれる荘厳なる枝を縦横に交叉せ
て山峡にうねりを描き[illegible]に或は急湍の守
りを一手に引き受けた猛将のごとく、山嶺の雲際に
立ち誇って怒張する雄姿、[illegible]に[illegible]
虎は[illegible]のめく[illegible]は、草原[illegible]鏡面
の[illegible]が黒漆の大画鏡を前に[illegible]めく、[illegible]の
ある彩飾を絡んで一点ともつけ[illegible]

雄渾な雄姿は、ナポレオン三世が麾下の名将軍等に令し[illegible]を[illegible]せつゝ、自らは皇帝の侮れざる[illegible]をしめして行きてた将別るゝ[illegible]を抱ひ合わせてあらう。将等は己に折砕みて断腸して苦笑しつゝ言ったに相違ない。思ふが色彩の会[illegible]に嫁せられたるは、愛するに男女の[illegible]を噛み[illegible]るゝ物色の観念であった。事実は今にして他の一撃一笑を気か[illegible]得んがために、事実の[illegible]を白くし、紅ろにし、[illegible]もろしくしたことを知づる。かの帝[illegible]等か


原稿用紙

霧雪に屋やず何物に汚らずして、梓亭と望ねする作ると見るがよい。黒深い深い藍化な気を振る女黒の一色が、総第の精神と表裏一如となりつゝ、他と交渉して外に示されない[illegible]、葉々たる態度は、空に山のごとく高く、海のごとく深さすの西ろではないか。白楽天が六宝務使臣錫流の名句は、精美風雅純潔した[illegible]なる手[illegible]が、緑して以て[illegible]が[illegible]に粉紅した黄紅白紫が、桜、梅、梅の[illegible]送一切に立ち向い得ぬことを演劇してみると云って

よい。或は浮世画家の草花禽獣等を描く極彩色の
絵画師が、黒にあつても、雲母、金泥の背景に
画を描ける浮世の絵にはまさるものがあると云つてよ
い。要するに日本画の装飾は、鮮目だ
よ。まあもう一度過去に遡つて、暫くして考へ
做ふならば養騰本一流の大物に做はうよ。
如の様な達は手を筆に絵へ、葉をおろして、立か
なると筆を滲へ。
先達等の意見に従つて、群小畫家は筆
つて手を学び、模倣さへして筆を捨てた。

128

葉桐気の読書と表した。葉は落ちんと言ふのは、
紅葉のうちにも佳境とするところである。新しく
て綴葉の[illegible]長く続らうとした。黄紅白紫の落葉の粉
樹と僧てようとした。楓のいろく蝶に[illegible]入
のめざれ、落ちても紅葉にも似る、染まるめき彩
と描て、鈍色とも言ふべきであらう
色に色斑しいが、この[illegible]もその美しさの為
も美しい、見事しい、晩の菊花、寒の冷めても
ともいふべきであらう。
桐、白桐のめきれ、[illegible]
為も遠く落ちてゆく。
此の[illegible]の[illegible]ま


南畫院賞會原稿用紙
12.3—10000

深山に廻りあはないので、栃の巨大な葉に附着の紅色も見せずに終つた。萬山を飄揺させたものであらう。周囲になく遠景来の紅葉は簇ねず、一緒に行きかへ、緋深き時の給人等から二月の花よりも紅 [illegible] 紅椿花 [illegible] 深紅された。謂はゆる紅椿花の緑は、色ち花瓣のぬき若々しい紅と称して [illegible] に揃ふ [illegible] い地味な色になくなった。新に登場に出でまちえなうとする若武者のやうな紫赤と [illegible] 戻りやうな表情気もした。人が差し当たりの言葉を絶えず、梅雨あがりあと吹ま



10 20
12.5—10000
南雲堂賞會原稿用紙

疎に至る落葉樹の黄色を見るがよい。従来は色彩なことを除かれるその荒野はあるが、いつも北風に揺つてる四十度の大空間を突行した。その紅葉山桜の色彩は一齋に青くて黒くる。つて、目の醒めるやうな鮮かさ手しさを表つた。変するに落葉樹が常緑木の葉色に似つた紅葉、人の目を摩魅する絢爛相を嫌なる新の林造緑と相とを表つて草花も、青橙色、緑的なくすみ色となつたのである。かくして表新の季節の青葉を湛つた六月の美しい山々は出来

山家山の陰、向陽の峡にとざく青葉の連續とあつて、作るは杉、松、樟、椎、櫟、榊などの、常緑木の中間ともいふべき千やまき、中間の雑木でわづかに発する僅の新芽が、節つて落葉樹の間には常緑と新つゆうにまじつて来たのである。かうして常緑木が見えたあやうに伝へするこれ交る杉本勝等の消失する島尻の割合にわづかな言念とんせる外は信仰として或る姿を為くの所には、落葉樹林は常緑木の男性美に絶かつて、豊のまま色は深くて、雌気に雌花に似の葉色と変へつ

ので、芸等の説界は、あらゆる方面に流行して、新春の楽しい気分に富んだ世界から女性的な要素を全く見失つちやうにまで
のであるが、此の若葉等が常緑木を目ざしての模倣進軍は、尾を七月の末まで及ぼし八月の初め頃まで続くので、八月の初旬になると、山々一帯は常緑若葉けぢめなく緑一相と化し
あり気にすつかり常盤の様が却つて若葉樹より遥かと見えるやうになるのである。新たに
の七月の初旬頃を若葉樹等が第二回目的副期

或は常盤樹若葉樹の安穏期と呼ぶのである
が、此の安穏期が冬た十月の半ば頃まで続いて、
やがて二者の盛熟期即ち落葉木の紅葉期となる
るのである。無論何物にも時代の流行に魁けする早
走りの性質があつて、或は梅雨明
け早々の土用時分頃に於いて真紅の紅葉を見せる
楓のめきがある、或は十月の初めまで満山緑葉を
たゝ間に燃えるやうな艶紅葉を見せる七竈の
如やうなものもあるけれども、常緑近の山れ
の常緑落葉一如の緑樹期のつゞくのは、先づ十


南画院賞会原稿用紙
12.3—10000

月の半ばを過ぎるのが絶頂であらう。　十月の序を開くと初霜、しめぢ、桜葉等の木の葉が色づいて来るが、落葉木が容易に色を変へようとしないのが常道である。　紅は今年、十月の半ばに至つて始めて、甲府の山々の紅葉する様子が一向見えないので、気候の変態か、或は今の多摩の諸山の樹種かと考へたが、その中央に聳ゆる　の序に、郡の田畑の縁、東京の水田、隠線雲まで　しの新りか盛穂ゆたかに實穂のみのりを見せると、それと呼応するかのやうに、四方の山々が

かすかに紅、黄、褐の斑色をとどめて来
たのしませてくれた。欅は淡黄に

　秋の絵の縁取の色に留まりや
　四方の山々はもみぢするらし

と偲んだが、私の窓目にすれば、東京附近の山々
は田野の緑條の変更に呼応して、草の紅葉を始
めるらしい。燥ぐかぬき目前に打たれつつ、
緑一輪の山色を染めあげ、野の泥土に青い濁模
樹を描き出した山と里とが、前様を写す
かのめく、件若く紅葉伝動を始めるのも偲しい

136

ことである。

わたくしの新緑雑談は論じても、説いても、随筆とも抄出ともつかぬ、まあいわばアト・ランダム式のものであるが、大東亜戦以来、固く封ぜられ気候も、時代の太平記時代に入って、大らを挑って暗を行わずやられるであろう、その実状を伝えつつ、序に枝数を識するのも時であろうとおって、諸氏の幸業に比して、ま、よりなるが、うんともすんともわってしそのべある。

する日に新の新緑紙は、若葉来の新芽は、前之

る和家に耽りて、見すほらしい存在に気と解ら
しが、

須磨

夢を追ふ

昭和二十年十一月四日午前「須磨」の詳細を

執りはじむ。此の日晴れたれど風強し。三月

に前奏ともいふべき大阪舞踊ほとして国語と新の一つ

、遊へけんを一して国術に出る会議に情え

つ、進へけんを、有りがたき御心の家庭に

よう、かやまき心も



20.11.3

~~21.10~~

# 梅

ちて筆を持ちつゝ古典籍等の可筆に游ける得
るぞ嬉しき極みなる。 私は今も筆を執り得
る從来に頼之て、年の歩みは更の進みなから、稲
待ちに三帖の追懐用ゐ返しつゝ俳書等し同じ手控に
斎に紹ちし古人先達間にも人蘇原斎道がわが小庵記
の家を去るとならばこて中宮を見る、文字三
連なる千一首にて綴したる子と、頗しくも、氣の毒
ほも、京わたりも想ふ限りつゝ、感謝の情念を能
り候ひそ。
私は編みてゆきゆきたるまで約七十日、そ



10×20 南畫院賞會原稿用紙

の間、禅の修業を積まし、ついで紀州と熊野を一周して、今や終焉に入らんとす。これについていさゝか感ずる所あり。やすく作者の創作心理的に傷める天才作家の創作心理は容易に窺知し得べきことにあらず。紫式部が[illegible]学者的の心理なども、その学者窺[illegible]道き部分に限すべけれども、[illegible]とるならば、彼女は恐らく学術的探究の境域によ[illegible]新派の志操の意味によ[illegible]母情本体の意味によ[illegible]り、[illegible]好んで、しかし[illegible]は[illegible]大学の筆の修練と


[illegible]原稿用紙

手一つで、[illegible]織[illegible]の[illegible]陀[illegible]打を現はさん[illegible]の[illegible]
味によつて、[illegible]の[illegible]めて継ぎ[illegible]ほ式の一[illegible]とか
へたらう。
兎もかく [illegible]十[illegible]へ、そ[illegible]の一つは山間[illegible]
地の言語の系統と、瀬戸内海沿岸の田舎びたれども
美しき浦廻に繋びあることと一致す。 新宮上流の
[illegible]人等と、遠[illegible]の迄せる田舎びた言葉の[illegible]に
培はれたことと、一致す。 [illegible]に生まれ、[illegible]の[illegible]と
あつて、[illegible]才能と兼ね備へ、[illegible]あらゆる方面の[illegible]
意を得て、[illegible]に[illegible]やかされ過ぎたる[illegible]

一新に躍進せしめ、新時代に於ける俳句と詩人群像

の望風より新鮮にて無作為なる一論見なからし

めしことを一言して然し猶作品は無名の二たらん

於ける此の新作は計畫を除きて人かぬめ

に花鳥風と叙事詩形式の一篇として而てその

泥臭の緻密体の二種を様式底式の一篇と

して居るまでは、而して一つの性格相互的十歳に

至る大道命の風俗に於ける風土たる自己の筆体

めに、謂はば一般的の肉体的の心境あるしな

らぬものの心境は実に大所に傾きて、此の為



10
20
南畫鑑賞會原稿用紙

総形式が後至の複式の女篇をいそてゐる、まこ大天木の椿用なさ深行きと結ずる。淀さん目立つて面白きは此の女主人公花影里の一家務めてゐる娼妓等。相変はらずの女性群その娼妓はいづれもそれぞれ、いづれも花に飽きる劇場等。いづれも芸娼に恋あすれ、なほなくとも恋愛の情を中心として書き落あられる女性等。其の間にあつて、此の花影里一人は伯爵の存在にして、娼を離れたる道徳的の描写たるの観あり。要ずるに作者は此の女性に對し、省筆の

玄紀物ぢや。

それとも、あの女の方がめづらしく、梅壺女御に

十年ぶりの再会であったに、その女房は、

ようにかくれのされるかたが、つらかったもの

われぬめて、何やかやと、例の紫の上が思われる

の結ぶも、思ふがままに行かなくなる

とあらばあの家の方の門へ入って来る

の路しいかが済ませるか、他人には見えることの

生きぬみしい人の宮子家ので逢はれぬ印刻

に、もう長い小路の路みも忘れてしまわれた

ことであろう。やがて何や経ねと、例の女の心

を惹きつける体物語である。うまいものだが、ま
さ文膜はらいを言はれるのではあるまいと
読ー、女はが、他の女私に対してはじめて違ひ
た時、各々の遠慮、或は交際の障碍の打破、或は安
協等について、或は数十行、或は半巻の筆、或は
全巻或はそれ以上を費したが、拘はらば、此
の女私は筆ーらは、此の経過にかけて、始めて叙
様式に、相当浸の女房等、女の姉ける三の丸
に内容あらすではかるくほのめかしてしお然
云々と書いただけ、飛ばしては此の辺に触れいて

のねめの大筆



10/20 南書館製原稿用紙

（ゆつくりと）

女御と定めたる後は、宮はその部屋を訪ねて、給
や後や御の[illegible]く語らひ給ふも、思はぬ事に
はあらざるべし、と書いたれば[illegible]にて其の絵草子を
見据ゑ、後書にはいては、此の女房に対しては、因
家の様等などは描かれたるかなかなかは[illegible]して[illegible]
[illegible]女房の[illegible]み深き[illegible]を試みられ、また[illegible]女の
若者を[illegible]して此の女房達[illegible]見ること[illegible]
道[illegible]の[illegible]と[illegible]の女房にまつへ[illegible]
とりとめ[illegible]など行[illegible]の[illegible]をとりきて
[illegible]など[illegible]して作者[illegible]の女主人



10/20 [illegible]原稿用紙

公に對して将軍の設るを許さるゝことを推察し得よう。さうした此の女房が明石の局の有氣調ものゝかけの神家的總角と並べたる我はせとる人物描寫にしてその描寫に深遠の妙趣あるをもといへば、さにあらず、他の女房とは異に特別に精細にしたる性格描寫を持ちながらそれであって総括し将軍の存在を保ちつゝその行為動作言ふ向かう、その性格の保き底描き出づるところさすがは大天才の筆陣の經緯と見せて、言ふべからざるものあり。なほ言れなば上品なにしか好評かよき

けてミンネリ・4ワリりの暮の上に澪氏に心ひか
れながら、神[illegible]のくあに、一家に上の文字を訓読あきら
めとほと宗教、王家統流の由緒き家系とあけ
あがら極秀なる新胡と見へ、出帝衛[illegible]に備
勢に呼嗚と無粋しつ、いかにも札堅くして節操、
を守り通し、手揺花やうやく千家を出でたは
めりの折に登みきれ未練[illegible]あ[illegible]如
として[illegible]の家系の維系をとり、そして
の維系の中に実に準備し[illegible]てきた人物化
りうるやたる物の上に、いづれも作家が好


南書館賞會原稿用紙

また捏つち上げたる架空の人物らしく、手書の
その手腕にては文字の上の操へ物以上の生命
を賦與し得ぬ代物なるべきに、まんまと造化主
が気息を吹き込みたる個性ある親なる個様
のある描写の活動振りにて、その説話の一人
に張りある手に依あらわれて、それ故く斯く怪は
ずれの人物とかうまで活きくと面白く描き
たる手腕に依る。殊に其妻の中程には
はも早諸氏一て過ぎ嫁ばすべき夢物の、玉の危
なきかめき女性と、驚きする精神も失、周囲

の男女間に於いて三派ある微妙的関係を保ちつつ
、人々に出来るから、その結果生まれ来る重んぜられて、その結果の
気分を盛らせるやうな描写にさせる、微妙な描写
の美味を持って。
かくいつてはめやうにも入り得るの感覚での
やうに刻みて、毛を吹いて美しき肌理を探るかのやうな
き鋭い所あって、余はその細密なる若き女
性の挿入を除いて、作者が創作視野の広大なる
を体験するまでする、作の全面に渡る情感の
世界を縫い浄化するまでとて、八方に目



10/20 南書房原稿用紙

を観る大家の偉称と、半没写動的談の態、すべて
を利用し活用する技術を示すものとなし、無軍
芸術の技芸を書くなる故に於ける最後の一
般一致となし、同時に其の基礎なるか筆の力節
面に立つて大面に活をうれ、人生の大事と唱字
する鍵ならしめんとするに至つたと思考する
なり。而してまた大作家が筆の終わに見せなる
内語自然の曲節の離れ業と、わかすに比没す
まる真に不備許がしき嫌はあれども、字もまた損
立派未熟になる十五の筆の流れ、特に大患の後



10×20 原稿用紙

れを擁懐する一時一盞として、此の病の和きた
る小篇を譯ろし、病身に鞭うつゝ、新に須臾の流
兩篇の叢新なる病の翁身に入らんとはするの

須臾の譯筆を結りつゝ、机上の筆立に、幸に
徒かざりし過去生涯の毛筆一本、此の筆
路を眺下してみてるとか隣く眺めつゝ、
羅紗して去らし筆ぐのうちに
師のかたみ一基濃として存り
筆あらば何ぞかゝらん師の毛筆

稿はつゞけと云ふるにあらで

昭和二十年十一月八日

多摩郡[illegible]の疎開寓にて

[illegible]

10/20 南畫鑑賞會原稿用紙

20.11.8

はじめ